

# お化けをかぞえる

妖怪の出でくる小説を書いて、民俗学史の研究めいたことをしていると、こんな質問をされること。がたまにある。

「妖怪って、どれぐらいの数いるのですか？」

質問した側はそんなに真剣な気持ちで聞いたのではないはずだ。だいたいの数を答えればきつと納得してくれるのだろうが、自分はつい真面目に考えこんでしまうのだ。

野生動物でも数えるみたいに、何匹ぐらいいるのかという意味ならば、想像上の存在が幾千億あるかなんて問いに答えようはない。どれぐらい資料が残っているのかという質問だとしても、正確な数など解るはずがない。きつとどんな大学者にだって、答えることなんかできないだろう。

では、どう答えればいいのか？

ついこの間までは、正直に「解らない」と答えていた。けれど、去年、ある研究発表をしたら「よく言い伝えられている類型の妖怪はだいたい二百十種ぐらい」と返すようにしている。

これは、決していい加減な数ではない。

見えるのか、聞こえるのか、触られるのかどんな感覚によって知覚されるのか。どんな形や音として認識されるのか。人間にどんな影響を与えるのか。そんなさまざまな属性の組み合わせとして言い伝え

## あだしの 化野 燐

プロフィール  
1964年、岡山県生まれ。妖怪研究家、作家、評論家、東アジア佐翼学会委員。考古学の学芸員を経て、1999年『幻想文学』（アトリエO.C.I.A.）誌上でデビュー。おもな著書に「人工霊器鑑識」シリーズ（講談社ノベルズ）や「考古探偵—法師全—」シリーズ（角川文庫）などがある。

にある妖怪たちをみなおして、頻出する類型を抽出して数える作業をした結果、得られた数字だ。

たとえば、木でも伐るような怪しげな音が聞こえてくる類型がある。「天狗倒し」とか「木伐り坊」と名づけられるものだ。これを名が違うだけなのに、それぞれ別に数えていたのではきりがいい。けれど、これらと同じ仲間の「怪音・伐採型」と名づけて、ひとつの類型だと把握する。こうしてやれば、随分とすつきりして、妖怪はあつかいやすくなる。

実はこの分類を行ったのには、もうひとつの理由がある。次に是非ともやらなければと考えていることがあるのだ。

たとえば、「怪音・伐採型」の霊的存在なのだが、南米アマゾン川の流域にも、「ヤシソゴ」という名前のこれとよく似たモノの言い伝えが残されているらしい。

なぜ、そんな遠く離れたところへ？

大昔にどこかで生まれた伝承が遠く離れたふたつの土地に伝わったのか、それともヒトが怪しいと感じる物事は世界のどこでも似たようなものだからなのか。

属性による分類をもとに、そんな視点からお化けの国際比較はできないものか。

最近、僕はそんなことばかり考えている。

## 月刊 みんぱく

3月号目次

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>お化けをかぞえる<br/>化野 燐</p> <p><b>特集 益虫 害虫</b></p> <p>2 虫と歩む人類史<br/>池谷 和信</p> <p>4 野蚕の宝庫 インド<br/>上羽 陽子</p> <p>5 じつは身近にあるラック<br/>北川 美穂</p> <p>7 害虫か、精霊か——タニをめぐるエピソード<br/>阿部 朋恒</p> <p>8 「害虫」という呼称の危険性について<br/>池田 光穂</p> <p>10 集めてみました世界の○○<br/>はきもの編<br/>韓 敏</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 文化遺産おもてうら<br/>文化遺産の「国際的」保護——何が正しいのか<br/>佐野 真由子</p> <p>16 多文化をあきなう<br/>足元から築くフェアな社会<br/>——フェアトレードタウン運動<br/>渡辺 龍也</p> <p>18 味の根っこ<br/>カレリア・パイ<br/>庄司 博史</p> <p>20 異聞逸聞<br/>数々の思い込み<br/>八杉 佳穂</p> <p>22 制服の世界、世界の制服<br/>異性をまとう<br/>久保 正敏</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|